

元・楊桓『書学正韻』と『五音集韻』

大岩本 幸次

元の楊桓が編纂した『書学正韻』は韻分類の字書だが、いわゆる韻書と呼ばれる資料が往々にしてそうであるような、韻の通用を確認する、あるいは字義を検索するといった用途を考慮した作りになっておらず、書の特徴としては掲出字が小篆と隸体で掲載される点が注目される程度で、切韻系の韻目を採用しながら同用・独用の表示もなく、字義も終盤になるにしたがって省略が多くなり充実しているとはいえない。楊氏の著作に『六書統』『六書溯原』が他に知られるが、これらは部首分類字書の体裁をとり小篆で掲出字を示す文字学の書であるところから、おそらく『書学正韻』は『六書統』等といわゆる“篇韻”の対をなす存在として字体検索のために編まれたとも考えられる。韻分類である限りにおいて韻書の一種といえるものの、字体検索が主たる用途という、いわば文字学に付随する内容であるため、解題書では「字体韻」として他の韻書と区別されることもある(1)。また、『四庫全書総目提要』に「桓既著六書統、六書溯原、又依韻編次是書」(卷四十四)と記されたことが、該書が韻分類であること以外『六書統』等との内容的差異があまり無いと認識されたことにつながったであろうか、『書学正韻』について従来ほとんど具体的な言及がなされてきておらず、『広韻』(一〇〇八年)との関連が指摘されることもあるが、書の中身についてよく分からない部分も多い。

小稿では『書学正韻』の特徴を整理し、該書が『集韻』(一〇三七年)を基盤に据え、金・韓道昭『五音集韻』(一二〇八年)を補助材料として編纂された可能性について述べる。

一、編者

編者の楊桓については『元史』卷一六四に伝があり、それによると楊桓は山東兗州の出身で字を武子といい、また『六書統』にある倪堅の序に「先生諱桓、字武子。夫人孔子五十三世孫、子男五人、所居魯■南之三里許、曰達泉、疏而為辛泉、因以自号云」とあって辛泉と号したらしい(2)。諸生の時分より学問に秀でて周囲の注目を集めたらしく、中統四(一二六三)年に濟州の教授となった後、中議大夫であった堅童の推挙を受け(『元史』卷一三四閭閻伝)、中央に

赴いて太史院校書郎や祕書監丞、監察御史を歴任、また祕書少監を務めて「一統志」の編纂に関わった。その後は郷里に隠居して家産の整理などを行っていたようであるが、大徳三（一二九）年に国子司業に任ぜられ、しかし赴任を果たさぬうちその年に六十六才で世を去ったという。『六書統』自序によれば「愚自童幼読書、既冠即知遊心書学、曉述文字之本原、見古文篆籀石刻、輒傲玩不置手」と、若くして書学および篆書籀文など古文字に興味を持ち造詣を深め、文字の学を推究して『六書統』『六書溯源』『書学正韻』を著した。また、陶宗儀『書史会要』に「大小の篆書を善くす」（巻七）と記されるように篆体の書家としても評価を得ており、「李翰林酒楼記」（一二九三）や、また趙孟頫らの書と併せて一作品にまとめられた「無逸篇」（一二九九）といった晩年の作品が今に伝わっているようである(3)。

二、版本

本稿での考察において中心的に用いた『書学正韻』の版本は国立公文書館に所蔵される内閣文庫本、資料番号「別五〇」である。三十六卷十冊で、版式は有界八行、左右双辺、対向黒魚尾、線黒口となっている。公文書館の目録によれば「元刊（明印）」、高野山釈迦文院旧蔵本であるという。内容は「書学正韻目録」に始まって序文の類がなく、書の末卷に「二年八月江浙等处儒学提举余謙補修」と補修の事実を記すほか刊行の経緯も不明であるが、巻第一の第二行に「奉直大夫国子司業楊桓撰集」とみえる官名から該書が楊桓死後の刊行であることがうかがえる。『六書統』の場合、劉泰の序に「先生幼子守義、得父之伝而精其業、多士嘉之、朝廷特命駝驛往江浙行省刊板印書以広其伝、可見崇重至美之意」とあり、楊桓の子である楊守義が朝廷に献上した書を、詔勅を下して江浙行省の関係機関に鑄版させたものという。倪堅の序によれば守義の献上は至大元（一三〇八）年のことであつたようである。その『六書統』の版心に刻まれる多くの刻工名は『書学正韻』に見えるものとよく合致しているので、『書学正韻』も『六書統』と同様に、子の楊守義によって献上され刻書に付されたものである可能性が高いと考えられる(4)。台湾の国家図書館には『書学正韻』二本を蔵し、その所蔵目録に「元至大間江浙行省刊後至元二年余謙及明代遞修本」と記して該書が「元至大間江浙行省刊」であることを明確にしているが、これもおそらくは同館に所蔵する楊氏『六書統』と『書学正韻』との間に、刻工名や紙料などの点において密接な関連が見いだされたことが、判断の根拠にあるものと推測される(5)。国家図書館本を内閣文庫本と比較してみると、版式や破損の状況、また書の末卷にみえる「二年八月江浙等处儒学提举余謙補修」の記述も共通しており、二種は同版であるとみられる(6)。国家図書館の見解に従うならば内閣文庫本も同じく「元至大間江浙行省刊」の元明修訂本とみなして良いように思われるが、余謙による「二年」の補修を「後至元」年間と断定

する点は根拠が不明で、現時点でなお疑問を存するところと思われる。その他、中国における所蔵状況について、『中国古籍善本書目』および『文字音韻訓詁知見書目』によると、南京図書館の「丁丙跋」本のほか、天一閣文物保管所に元刻本等の残巻、北京師範大学、福建師範大学、雲南大学に元刻明修本の残巻、北京市文物局に元刻明修本の完本が所蔵されているようである(7)。南京図書館に所蔵されるという「元刻明修本」は『四庫全書存目叢書』經部第二〇六冊にその書影が収録されており、巻首巻末は失われて修補に関する刊記も確認できないけれども、版面の破損状況等から推測するに、内閣文庫本と同版であるように見受けられる。

三、韻目

『書学正韻』の韻目構成については李新魁氏らに簡単な言及があつて、おおむね『広韻』の分韻を採用していること、平声の臻韻を真韻に併合して(但し相配する入声の櫛韻は合併せず)二〇五韻とすることを述べ、また、『書学正韻』で元韻(及び相配する上去入)を魂韻や痕韻の後に置くという、『広韻』『集韻』と異なる現象について、『韻鏡』など韻図と共通するものであることを指摘している(8)。

『書学正韻』の韻目について、次頁に毎巻の韻目構成を表にしたものを挙げている。『書学正韻』の本編はたとえば巻三十四が全て失われているなど脱落が非常に多く、表は『書学正韻』の目録にしたがって作成した。表中、たとえば「卷一」であれば「1」とのみ表示することとし、その右に各巻に収録される韻目および順序を示した。合併等により韻目を欠いている、あるいは相配する韻目が元々ない場合には「一」をもって示している。

この『書学正韻』の韻目を『広韻』と比較すると、李氏らの指摘するように韻目用字の大半が共通しており、臻韻を真韻に併合したとする李氏らの見方もその通りと思われるが、細かくみれば『書学正韻』では『集韻』の韻目用字を優先して用いる部分も少なくないようで、平声でいえば『広韻』の「肴」でなく「爻」、「添」でなく「沾」、上声では「麌」でなく「嘯」、「彌」でなく「杞」、去声では「霰」でなく「園」、「嶮」でなく「陞」、「鑑」でなく「筭」、入声では「鐸」でなく「輦」という韻目用字を採っている。李新魁氏らが韻目について“おおむね”『広韻』の分韻を採用して云々というのは『書学正韻』の韻目に『集韻』の用字が混じることをいうものかもしれないが、その他の韻目は「沃」を除き『広韻』と『集韻』とで用字を同じくしてほぼ異同がないし、次節以降に述べる小韻内配列ほかの状況が『集韻』と共通する点を併せ考えるならば、韻目についてはむしろ全面的に『集韻』を採ったとみるべきかと思われる。

また、元韻が魂韻や痕韻の後に置かれるという処理については、後に述べる『五音集韻』との共通点を考え合わせると、『五音集韻』に確認される同様の状況を『書学正韻』において採用

した可能性も考えられる。『五音集韻』における元韻の処理については、寧繼福氏が当時の漢字音の変化を反映するものであると指摘して興味深いが、より直接的には、李氏らが言及した『韻鏡』など早期韻図を踏襲した処置であろうかと推測される(9)。

『書学正韻』 韻目表

上平声	上声	去声	入声	下平声	上声	去声	入声
1 東1	董1	送1	屋1	9 先1	銑27	26 霰32	屑16
冬2	—	宋2	30 沃2	仙2	杞28	線33	薛17
鍾3	腫2	用3	燭3	蕭3	18 篠29	嘯34	—
江4	15 講3	22 絳4	覺4	宵4	小30	笑35	—
2 支5	紙4	寘5	—	爻5	巧31	效36	—
脂6	旨5	至6	—	豪6	27 皎32	号37	—
3 之7	止6	志7	—	歌7	19 智33	箇38	—
微8	尾7	未8	—	戈8	果34	過39	—
魚9	語8	御9	—	麻9	馬35	禍40	—
虞10	嘯9	遇10	—	11 陽10	養36	樣41	葉18
模11	姥10	暮11	—	唐11	蕩37	宕42	鐸19
齊12	齊11	霽12	—	庚12	梗38	映43	陌20
5 —	16 —	24 祭13	—	耕13	耿39	諍44	麥21
—	—	泰14	31 —	清14	靜40	勁45	昔22
佳13	蟹12	卦15	—	青15	20 迥41	徑46	錫23
皆13	駭13	怪16	—	蒸16	拯42	證47	職24
—	—	夬17	—	登17	等43	證48	德25
灰15	賄14	隊18	—	13 尤18	有44	宥49	—
咍16	海15	代19	—	侯19	厚45	候50	—
—	—	25 廢20	—	幽20	黝46	幼51	—
真17	軫16	震21	質5	侵21	寢47	沁52	緝26
諄18	準17	稔22	術6	覃22	感48	勘53	合27
—	—	—	櫛7	談23	敢49	闕54	盍28
文19	吻18	問23	勿8	14 塩24	琰50	豔55	葉29
欣20	隱19	焮24	迄9	沾25	21 忝51	栝56	帖30
痕21	很20	恨25	月10	嚴26	儼52	驗57	業31
魂22	混21	國26	没11	咸27	謙53	陷58	洽32
元23	阮22	願27	—	銜28	檻54	筭59	狎33
寒24	旱23	翰28	32 曷12	凡29	范55	訊60	乏34
桓25	緩24	換29	末13				
刪26	潸25	諫30	黠14				
山27	產26	欄31	羣15				

四、収字配列

各小韻に収録される字の配列を見ると、こちらも『広韻』ではなく『集韻』の配列順序とよく合致する。下に『書学正韻』東韻精母小韻の内容を『広韻』『集韻』『五音集韻』と比較した表を挙げる(10)。表では『集韻』の収録字を中心にして、他の資料における当該字の配列順序を数字で示した。該当する韻目がない場合には「―」で示す。『五音集韻』の欄に数字が二種併記されるのは、『五音集韻』において一つの韻内に同一字が字体を変えて二回出てくる現象を表している。こうした現象が起こるのは、『広韻』と『集韻』それぞれにおいて同一字がその字体をやや変えて載せられているのを、『五音集韻』が別の二字として収録するためである。また『五音集韻』に確認される「06 爾」字は明版の増字で、いま直接に関係しないが挙げておく。

書学	集韻	広韻	五音	書学	集韻	広韻	五音
01	寂	18	23	21	菽	―	32
02	京	16	21/24	22	嗄	03	03/04
03	添	―	25	23	蜈	―	33
04	訃	08	11	24	涌	11	14
05	刈	21	30	25	矚	―	34
06	勸	09	12	26	逮	15	20
07	幕	05	07	27	杣	14	18
08	掀	―	08	28	嫌	―	19
09	惹	04	05	29	恐	02	02
10	遮	06	09	31	腫	12	15
11	菴	13	17	30	𪛗	―	16
12	昶	10	13	―	絜	―	35
13	賣	01	01	32	潮	―	36
14	振	―	31	33	嗟	―	37
15	弱	07	10	35	珪	―	38
16	枉	20	28	34	業	―	39
17	癖	―	29	36	曝	―	40
19	𦣻	19	26	37	嘗	―	41
18	薨	―	27	38	浩	―	42
20	董	17	22	―	―	―	06 爾

このようにみると『書学正韻』の配列については多少の順序の前後は生じているものの『集韻』と基本的に同じ配列順序を採用していることが分かる。韻目の点において『広韻』が顧みられなかった明確な理由は分からないが、『広韻』の収録字数は『集韻』に比べて半分程度と少ないため基盤としては使いづらい面もあるとすれば、そのことが『広韻』が重視されなかった

要因の一つにあったと推測される。収録字数だけでいうと『広韻』『集韻』両方を包括した内容の『五音集韻』も十分に適格であるかに思われ、後述するように実際に『五音集韻』も『書学正韻』の編纂に際して使われなかったわけではないとみられるも基盤としては採用されていない。『五音集韻』が補助的な役割に止まった理由の正確なところはよく分からないが、枠組みという点で『集韻』と『五音集韻』との顕著な違いは『五音集韻』が韻目を合併して百六十韻としていることであり、あるいは楊桓にとって『五音集韻』の枠組みが二〇六韻を揃えていないことは楊桓自身の言葉を借りれば“俗制”であって、本来あるべき姿とは異なるものであるという認識があったのかもしれない。

五、反切

調べてみると『書学正韻』の反切は大半が『集韻』と合致するが、そうでないものも少なくない。次頁に『書学正韻』に確認された『集韻』と異なる反切を列挙し、『広韻』と共通する反切用字のものには「G」、『五音集韻』と共通する反切用字のものには「W」と付記し、韻目の合併を経ている『五音集韻』では確認できない反切については「*」を付した(11)。紙幅を省略する目的で韻目や等位、また帰字に関する情報は割愛している。

現在までに目にできた『書学正韻』版本はいずれも版面状態が良好とは言えず、小韻自体を脱落・省略していたり当該箇所が汚損していたりといった理由により反切を判読できない箇所もかなりある。表中の挙例もあくまで確認できた範囲内で気がついた差異を抽出したもので、『書学正韻』反切の全容はいまだ明らかでないというべきであるが、およその傾向として『書学正韻』において『集韻』と異なる反切は『広韻』また『五音集韻』と共通する場合が過半を占めるということは分かる。そうでないものに関しても、反切上字のみあるいは下字のみが『広韻』『五音集韻』と共通するケースが見受けられ、おそらく参考にした他の韻書にあった反切用字を使って楊桓が『集韻』反切に変更を加えたものと推測される。変更理由については傾向として上字について開音節字を好むところがあるようで、また「思將切」でなく「息將切」とし、「思晋切」ではなく「息晋切」を採用するなど、帰字であるそれぞれ「相」「信」について舌歯音非口蓋化を経た「思」字を使うことを避けたものと推測されるが、理由のよく分からない例も多い。韻目合併により多くの小韻を消失した『五音集韻』をもってほぼ全ての例と照合が可能なことや、『五音集韻』のみに確認される反切用字が用いられることは、『広韻』よりは『五音集韻』が主として参照されたことを示唆するように思われる。『広韻』と合致する例として僅かに山韻「古頑」「委鰥」の例があるが、これらも必ずしも『広韻』を参照したものでなく、上字として使用頻度の高い字が選ばれた結果、偶然『広韻』と合致した可能性が考えられる。

書学	集韻	書学	集韻	書学	集韻	書学	集韻	書学	集韻
古紅 ^{GW}	沽紅	方味 ^{GW}	方未	康很 ^{GW}	口很	乞黠	訖黠	迄逆	迄約
苦工	枯公	拳魚	斤於	烏恨 ^{GW}	於恨	他前 ^{GW}	他年	離灼 ^{GW}	力灼
五東 ^{GW}	五公	丑居 ^{GW}	抽居	鉏臻	鋤臻	蘇前 ^{G*}	蕭前	息兩 ^{GW}	寫兩
莫紅 ^{GW}	謨蓬	矢魚	山於	所臻 ^{GW}	疏臻	火千	馨煙	息將	思將
於公	烏公	狀呂 ^{GW}	狀所	直隣	池隣	烏蓮	因蓮	七雀 ^{GW}	七約
盧紅 ^{GW}	盧東	央居 ^{GW}	衣虛	女隣 ^{GW}	尼隣	研蘭	研峴	在雀	疾雀
康董 ^{GW}	苦動	人諸 ^{GW}	人余	側隣	之人	五旬	倪旬	苦光 ^{GW}	枯光
母總	母摠	尼呂 ^{GW}	碾與	植隣 ^{GW}	丞真	胡旬 ^{GW}	形旬	烏晃	烏曠
胡孔 ^{GW}	戶孔	昌與 ^{GW}	敞呂	寧因	禰因	五官	吾官	于兩	羽兩
蒲貢	菩貢	承與 ^{GW}	上與	七人 ^{GW}	雌人	於丸	烏丸	丘縛 ^{GW}	屈縛
渠六	渠竹	人渚 ^{GW}	忍與	於真 ^{GW}	伊真	蘇管 ^{GW}	損管	女庚	尼庚
仲六	佇六	辛於	新於	居忍 ^{GW}	頸忍	苦喚	苦玩	眉庚	眉耕
沽宗	古宗	七與 ^{GW}	此與	丘忍 ^{GW}	遣忍	郎段 ^{GW}	盧玩	符兵 ^{GW}	蒲兵
作冬 ^{GW}	祖實	私呂 ^{GW}	寫與	息晉 ^{GW}	思晉	莫括	莫葛	丘敬 ^{GW}	丘正
戶冬 ^{GW}	乎攻	余呂 ^{GW}	演女	居質 ^{GW}	激質	女還 ^{GW}	尼還	魚敬 ^{GW}	魚慶
莫綜 ^{GW}	莫宗	古乎	攻乎	乃本 ^{GW}	弩本	博告	博号	秉病	鋪病
乎宋 ^{GW}	胡宋	苦胡 ^{GW}	空胡	包悶 ^{GW}	補悶	知交	陟交	於敬 ^{GW}	於慶
將毒 ^{GW}	租毒	博弧 ^{GW}	奔模	呼悶 ^{GW}	呼困	布交 ^{GW}	班交	女耕 ^{GW}	尼耕
九容 ^{GW}	居容	康杜 ^{GW}	孔五	古忽 ^{GW}	吉忽	鉏交 ^{GW}	鋤交	莫經 ^{GW}	忙經
曲容 ^W	丘恭	唐五	動五	徒骨	陔沒	許交 ^{GW}	虛交	呼經	醯經
女容 ^{GW}	尼容	旁古	頗五	胡骨	戶骨	古巧 ^{GW}	吉巧	乃譚	乃挺
府容 ^{GW}	方容	采古 ^{GW}	付五	昌脣 ^{GW}	樞倫	初爪 ^{GW}	楚絞	古歷 ^{GW}	吉歷
職容 ^{GW}	諸容	徂古 ^{GW}	坐五	於倫 ^{GW}	紆倫	孝咬	孝狡	戶萌 ^{GW}	乎萌
尺容 ^{GW}	書容	侯五 ^{GW}	後五	詳遵 ^{GW}	松倫	都聊 ^{GW}	丁聊	戶局 ^{GW}	玄局
虛容	許容	郎古 ^{GW}	籠五	子聿 ^{GW}	即聿	輕皓	起了	古定 ^{GW}	局定
武玉 ^{GW}	某玉	模故	莫故	慈律	昨律	五弔 ^{GW}	倪弔	於詠	於正
即容	將容	仕于 ^{GW}	崇劬	其謹 ^{GW}	居謹	直遙 ^{GW}	馳遙	息營 ^{GW}	思營
子用 ^{GW}	足用	雛禹 ^{GW}	撰禹	吾斬 ^{GW}	語斬	式招 ^{GW}	尸昭	於營 ^{GW}	絹營
五江 ^{GW}	吾江	所矩 ^{GW}	爽主	拳云 ^{GW}	拘云	虛嬌	虛驕	子苟 ^{GW}	子口
都江 ^{GW}	株江	敕俱 ^{GW}	椿俱	渠云 ^{GW}	衢云	力昭 ^{GW}	離昭	呼后 ^{GW}	許后
抽江	丑江	直誅 ^{GW}	重株	敷吻	撫吻	皮表	被表	胡口 ^{GW}	很口
匹江 ^{GW}	披江	方矩 ^{GW}	匪父	於粉 ^{GW}	委隕	直照 ^{GW}	直笑	都候	丁候
呂江 ^{GW}	閭江	王矩 ^{GW}	王巨	許間 ^{GW}	虛閑	祁堯	祁宵	直由 ^{GW}	陳留
都降	陟降	九遇 ^{GW}	俱遇	戶間 ^{GW}	何間	方小 ^{GW}	俾小	府九	俯九
色降	朔降	而遇 ^{GW}	儒遇	五轄	牛轄	牛何	牛河	居祐 ^{GW}	居又
古岳 ^{GW}	訖岳	五皆	宜皆	語軒 ^{GW}	魚軒	寒哥	寒歌	皮幽	平幽
五角 ^{GW}	逆角	丑皆 ^{GW}	仲皆	古頑 ^G	姑頑	於何	於河	去金 ^{GW}	祛音
土宜 ^{GW}	仕知	央皆	英皆	委鰥 ^G	逯鰥	徒可 ^{GW}	待可	渠金	渠今
直离	陳知	賴諧	賴皆	力頑 ^{GW}	盧鰥	來可 ^{GW}	郎可	女心 ^{GW}	尼心
又宜 [*]	侈支	薄楷	蒲楷	古覓	古幻	則箇 ^{GW}	子賀	職深 ^{GW}	諸深
掌土 [*]	掌氏	莫拜 ^{GW}	暮拜	甫煩 ^{GW}	方煩	五禾 ^{GW}	吾禾	於今	於金
息茲 [*]	相支	堅兮	堅奚	附袁 ^{GW}	符袁	丁戈 ^{GW}	都戈	犁箴	犁針
母被 [*]	母婢	先稽 ^{GW}	先齊	去阮 ^{GW}	苦遠	土禾 ^{GW}	土和	為及	域及

去為 ^{GW}	驅為	通礼	士礼	虞遠 ^{GW}	五遠	才果	粗果	秦入 ^{GW}	籍入
許為 ^{GW}	吁為	烏弟 ^{GW}	杳礼	於願 ^{GW}	紆願	烏果 ^{GW}	鄒果	於含	烏含
人垂 ^{GW}	儒垂	里地	里弟	拂伐 ^{GW}	弗伐	五貨	吾貨	子答 ^{GW}	作答
於詭 ^{GW}	鄒毀	柱懷	幢乖	去乾 ^{GW}	丘虔	許遮	呼十	壯銜	壯咸
居窺 ^{GW}	均窺	丑怪	迍乖	九穉 ^V	九件	鑊葦 ^{GW}	驢韉	五陷 ^{GW}	午陷
去規 ^{GW}	缺規	古攜 ^{GW}	涓畦	式善 ^{GW}	矢善	苦加 ^{GW}	丘加	古念 ^{GW}	吉念
許規 ^{GW}	黼規	普才 ^{GW}	鋪来	筆列	筆別	普巴 ^{GW}	披巴	七濫	又濫
陳知	陳尼	倉才 ^{GW}	倉来	居延 ^{GW}	稽延	初牙 ^{GW}	初加	奴盍 ^{GW}	諾盍
年支 ^W	女夷	古亥 ^{GW}	己亥	芳連 ^{GW}	紕延	鉅加 ^{GW}	鋤加	初檻 ^{GW}	楚檻
職夷	蒸夷	普乃 ^{GW}	普亥	方緬 ^{GW}	俾緬	苦下 ^{GW}	口下	女法 ^{GW}	昵法
其至	巨至	昨宰 ^{GW}	盡亥	婢面 ^{GW}	毗面	居訝	居迂	方乏 ^{GW}	弗乏
魚致	魚器	呼亥	許亥	居員 ^{GW}	拘員	徐垂	徐駕	孚法 ^{GW}	巨乏
匹夷 ^{GW}	篇夷	来亥	里亥	丑緣 ^{GW}	椿全	白駕 ^{GW}	步化	于乏	下法
古季	吉棄	五代	牛代	直緣	重緣	鉅駕	助駕	蚩占	處占
巨為 ^{GW}	巨達	五蓋 ^{GW}	牛蓋	於權 ^{GW}	紆權	尺遮 ^{GW}	昌遮	意笈	憶炭
渠嬌 ^{GW}	渠龜	蒲貝	蒲蓋	儒劣	如劣	寫嗟	思嗟	郁輒	域輒
中佳	中葵	胡買 ^{GW}	下買	疾緣 ^{GW}	從緣	以遮 ^{GW}	余遮	蒲占	蒲瞻
是佳	視佳	魚廢*	魚刈	隄緣	隄緣	羊者 ^{GW}	以者	長琰 ^W	牒琰
以追 ^{GW}	夷佳	公回 ^{GW}	姑回	七絹 ^{GW}	取絹	枯華	姑華	父鄧 ^{GW}	陟鄧
書之 ^{GW}	申之	蒲回	蒲枚	息絹 ^{GW}	須絹	枯瓜	姑瓜	綺競 ^{GW}	欺矜
如之 ^{GW}	人之	徂回	昨回	七絕 ^{GW}	促絕	古駕 ^{GW}	古罵	其矜 ^{GW}	巨興
陟里 ^{GW}	展里	七罪 ^{GW}	取猥	徂雪	情雪	都剛	都郎	陟陵 ^{GW}	知陵
居衣	居希	都隊 ^{GW}	都内	蘇絕	相絕	作郎 ^{GW}	慈郎	非陵	悲陵
魚豈 ^{GW}	語豈	子对 ^{GW}	徂对	丘吁	墟吁	初亮 ^{GW}	楚亮	部孕	皮孕
許尾	許豈	丁外 ^{GW}	都外	古曷	居渴	知丈 ^{GW}	展両	渠力 ^{GW}	竭億
拳韋 ^{GW}	居韋	竹卦 ^{GW}	陟卦	唐葛	陟葛	時掌 ^{GW}	是掌	昌力 ^{GW}	叱力
虎鬼	詡鬼	戸恩 ^{GW}	胡恩	莫還 ^{GW}	謨還	張略 ^{GW}	陟略	常職 ^{GW}	丞職
巨異	巨畏	古很 ^{GW}	拳很	魚諫	魚澗	之略	職略	況逼 ^{GW}	忽域

六、等位整理

應裕康氏は『書学正韻』について、『四庫提要』に指摘される『書学正韻』の諸特徴、例えば字母等位を明記する点や、真韻字（開口）と諄韻字（合口）とを厳格に区別する点などが『五音集韻』と共通することを指摘し、等韻学が一定の発展をみた後は韻書の編纂者にとって等韻理論の習得は必須であったであろうと推測している(12)。示唆に富む見解であるが、真韻と諄韻の二韻間における開合の整理についてはすでに『集韻』にこうした状況がみられるので、『書学正韻』と『五音集韻』とを結びつける特徴とはいえない部分がある。ただ、『書学正韻』では等位に関連して特定の小韻を他の韻に移動させるいわば等位整理のような処理を行っており、これと同様の状況は知られる限り『五音集韻』においてのみ確認されるもので、ここからは『書学正韻』と『五音集韻』との関係をみてとることができるかも知れない(13)。以下に『書学正

韻』に見いだされた例を挙げる。『五音集韻』（『五音』と略記する）に関連の文言がある場合にはそれを転記する。例中の「昌黎子」とは『五音集韻』編者である韓道昭の号であるらしい。

- 01) 塩穿三「舩」：説見談韻透母→『五音』衣色鮮也、此字元在覃韻中、充甘切、昌黎子改於此韻、部見元有、故不重頭、今覃韻中全棄馮、此一注、永遠為正矣。
- 02) 塩禪三「滿」：義訓判読不可→『五音』取也、住也、此字覃韻中常含切、今改於塩韻為正者也。
- 03) 塩禪三「擗」：説見覃韻從母→『五音』搔馬具也、此字元在談韻中市甘切、今移于此矣、昌黎子改也。
- 04) 塩日三「榔」：鬚の異体字→『五音』頰須也、莊子黑色而榔、此字元在銜韻収之、而銜為切、昌黎子為銜韻單収第二、故改于塩韻、永為正焉。
- 05) 旨喻四「輕」：説見脂韻喻母→『五音』起土為埒、元在尾韻中、欲鬼切、昌黎子為尾韻單収第三、故改于旨韻、永為正矣、後進詳之、豈不妙哉。
- 06) 山床二「寢」：崇山切、獸似豹、頭少文→『五音』は山韻、『広韻』『集韻』は先韻「崇玄切」。
- 07) 同 上「廈」：疾走兒、又火玄切、説見元韻曉母→同上
- 08) 諫照二「肆」：莊患切、謹也→『五音』は諫韻、『集韻』は線韻、『広韻』該当小韻なし。
- 09) 同 上「口」：説見至韻心母→同上
- 10) 諫床二「脉」ほか：土患切、並説見杞韻床母→『五音』は諫韻、『広韻』『集韻』は線韻。
- 11) 諫審二「箴」ほか：数患切、治車軸也→『五音』は諫韻、『広韻』『集韻』は線韻。
- 12) 羣照二「𠵽」ほか：説文黃黑而白、又短黑也→『五音』は鐸韻、『広韻』『集韻』は薛韻。
- 13) 清幫三「兵」甫明切：『五音』は清韻、『広韻』『集韻』は庚韻。その他、並三「平」符兵切、明三「明」武兵切、曉三「兄」呼榮切、影三「英」於驚切、喻三「榮」永兵切も同様に庚韻から。
- 14) 静幫三「丙」補永切：『五音』は静韻、『広韻』『集韻』は梗韻。その他、曉三「膜」況永切、影三「影」於境切、喻三「永」(反切判読不可)、来三「令」盧景切も同様に梗韻から。
- 15) 麻溪三「佉」去伽切：『五音』は麻韻、『広韻』『集韻』は戈韻。その他、溪三合「溢」丘靴切、群三「伽」求迦切、群三合「踰」巨靴切、曉三「裕」許遮切、影三「十」於靴切、来三合「註」鏤葦切も同様に戈韻から。

こうした、先韻系の照系二等小韻が山韻系へ移動する、あるいは庚韻系の三等小韻が清韻系へ移動するといった処理はおそらく『五音集韻』に基づいたものと推測されるが、例えば庚韻系について去声では小韻移動がみられず、『集韻』の状況をほぼそのまま反映するなど、全体的に処理が徹底されているわけではない。本書自体なお未完成であったためである可能性も考えられるが、次章の増字にも『五音集韻』に基づきながらの取捨選択の痕跡が認められるので、等位整理でも『五音集韻』が補助的な位置づけにとどまっていたことを意味するものであろう。

七、増字

『書学正韻』には『広韻』『集韻』以外の資料から増補されたとと思われる収録字要素を確認することができ、多く『玉篇』の内容と合致する(14)。確認されたもののうち一部を下に挙げる。表中『五音集韻』は『五音』、『書学正韻』は『書学』、『五音篇海』は『篇海』、『龍龕手鏡』は『龍龕』と略称を用いる。『玉篇』義訓は『書学正韻』に同じであるため反切のみ挙げた。

書学	玉篇ほか	書学	玉篇ほか
東端一「根」打也	都籠切	東端一「根」打也	都籠切
東従一「瘤」安也	祚紅切	東従一「知」水声	音藜
鍾疑三「命」獸似豕	魚容切	鍾徹三「滌」滌直也	救龍切
鍾孃三「稱」厚祭	尼龍切	鍾霽四「訖」土菌也	咨容切
鍾穿三「磅」行兒	昌容切	江見二「牙」衣帶	音江
江審二「為」蟲名	色江切	之審三「存」鳥名	音詩
微見三「俳」鳥也	居希切	微見三「淑」目也	居韋切
微奉三「弔」門火氣	孚微切	魚穿二「哦」牛角	音初
魚日三「綸」蟲名	仁余切	虞非三「弊」鹿属	音夫
模泥一「估」估室也	那胡切	模幫一「戸」金版	方乎切
齊匣四「杙」獸名	音攜	哈見一「糲」蟲也	音該
哈清一「咍」走也	七才切	真疑三「酌」頑也	宜巾切
真審二「射」二十枚也	所巾切	真影三「勸」黒也	於仁切
真影三「管」衣身	於人切	痕溪一「罹」口恩切、束也	(同左)
桓疑一「俚」窟也	五丸切	元群三「乂」禾黄也	渠元切
元見三「紕」紕蟬謁	居袁切	桓曉一「護」星名	呼官切
先見四「招泄」、孤独也	居先切	先見四「股」石室	音凋
仙從四「髭」鳥名	音錢	仙喻三「冬」鳥名	音員
仙喻四「頰」日行也	以專切	仙日三「誦」温也	奴卵切
蕭端四「痔」山穴	音凋	先見四「指」遠視兒	『龍龕』古玄反
宵曉三「娼」傲也	許驕切	戈群一「犀」魚名	午戈切
戈疑一「遮」角也	音訛	交幫二「寄」五彩羽也	布交切
庚見二「徭」能言也	古横切	宵喻四「潰」行不正也	余昭切
庚徹二「優」雨也	敕庚切	清並四「檻」毗名切、玉也	(同左)
麻並二「綬」角曲	音杷	清心四「癘」車也	息營切
清照三「堵」堵燭燼也	『篇海』音征	尤澄三「甥」繪白也	直流切
青曉四「騰」乘飛兒	呼鈴切	尤疑三「窟」鬼也	魚丘切
登幫一「亶」大雨	北朋切	清照三「証」諫也、又之盛切	(同左)
尤奉三「劇」星名	縛尤切	尤奉三「哺」牛黒唇	音浮
尤穿三「午」惡也	齒由切	尤照三「衢」神馬	音周
尤照三「緲」綿也	音舟	尤照三「睛」虎習也	織牛切
尤照三「閔」日光也	織由切	尤奉三「僧」破声	音浮
尤曉三「灼」目多汁	許尤切	塩精四「杏」蟲名	子廉切

侵見三「菊」利也	居吟切	侵疑三「孀」低頭行疾	牛欽切
侵清四「擦」魚名	七尋切	侵心四「月」金名	思心切
侵邪四「視」姓也	寺林切	塩群三「取」贅也	巨炎切
侯清一「候」崩声	七侯切	嚴疑三「吏」獸名	音嚴
董見一「廳」古孔切、生皮也	(同左)	董定一「幢」走也	徒孔切
董定一「舊」魚舊也	他孔切	董心一「端」門臼也	先揔切
嘯清四「茗」走也	千后切	旨幫三「軟」臀也	博美切
尾曉三「筆」火也	摩詭切	語澄三「刻」魚名	音宁
嘯微三「蚪」丑庚切、蟲名	丑主切	紙清四「佑」此贅切、獸名	(同左)
尾疑三「艣」進也	魚幾切	嘯心四「洪」義闕、姓也	思主切
嘯日三「悸」鞋悸也	而庚切	嘯穿二「矮」尺主切、行也	(同左)
姥精一「纏」田也	音祖	姥從一「皖」生虎也	昨古切
薺精四「榑」走兒	子采切	賄疑一「周」金周也	五罪切
海單一「重」角心也	多改切	軫影三「脩」於忍切、幢走也	(同左)
軫影三「佃」門中也	於脩切	早匣一「蠃」馬突也	何但切
產滂二「孀」門中視也	四限切	篠端四「釜」絹釜也	都了切
小群三「礎」行兒	巨天切	巧徹二「脚」丑卯切、毛多也	(同左)
小群四「玠」行兒	巨小切	小滂四「賑」鳥變也	匹沼切
小精四「蟀」走兒	子小切	小並三「猷」似羊善聽	干、平表切
篠端一「鮓」輕兒	音鳥	皓匣一「更」耳也	胡老切
皓泥一「稠」熟食	奴倒切	皓溪一「岐」水乾	『篇海』苦皓切
馬見二「肌」鳥名	音賈	滂二「嚙」短兒	匹馬切
養敷三「訝」急行兒	防罔切	養審四「詆」疾也	息獎切
梗見二「沼」角刺	音獮	養照三「峙」扇安皮	音掌
養審三「奇」戶耳也	書掌切	養喻三「焚」治皮	音養
養曉三「高」觀也、当也	虛掌切	靜來三「贅」雨後徑	力葺切
迥影四「耐」大水也	烏耐切	有照三「行」耳注	之酉切
宋匣一「則」石声	戶宋切	厚邪一「臣」徐垢切、白魚也	(同左)
暮見一「葱」祭也	音固	送疑一「汎」牛仲切、山名	(同左)
霽溪四「始」見也	口計切	宋精一「掀惹」犬生一子	子宋切
願非三「紅」魚名	音販	真從四「葺」口小也	藏賜切
代匣一「腓」走也	戶愛切	代疑一「胤」惶懼也、病也、駭也	五代切
澄端一「站」車羽也	都鄧切	翰清一「胡」水清兒	音槃
祭孃三「貢」女世切、姥差也	(『篇海』同左)	号影一「筵」温器	音隲
祭床三「呬」示勢切、角仰也	(同左)	過心一「婀」走兒	先過切
焮照二「蚬」阻近切、水急也	(同左)	宕定一「𪔐」艸名	徒闔切
霰端四「剗」山下穴	丁見切	号見一「索」久視也	古到切
霰曉四「侯」遠也、又文兒	許鼎切	澄滂一「詩」匹亘切	(同左)
線溪三「臭」臭開也	去戰切	澄滂三「綜」匹孕切、飛声	(同左)
嘯定四「贈」贈習也	徒弟切	效床二「虐」醉虐也	士孝切
笑禪三「曜」獸名	市照切	徑端四「梗」見也	多佞切
禡禪三「敝」時夜切、器也	(同左)	映匣二「梢」荒鳥也	戶孟切
宥邪四「絕」鳥名	似又切	證溪三「■」口孕切、噓也	簔、(同左)
笑喻四「出」魚身鳥翼…	與照切	霽喻四「厥」羊閉切、幻挈也	(同左)

屋端一「券」醜頭	陟目切	質疑四「孚」犬怒兒	牛吉切
月溪三「投」石也	音闕	曷影一「村」水名	烏割切
錫溪四「躁」吹声	輕歷切	未疑一「冂」地名	五活切
屑幫四「沌」斫也	方蔑切	屑曉三「冎」走也	火決切
屑曉三「將」急繫也	火結切	屑匣四「策」蟲名	戸決切
薛清四「蛙」皮斷也	七絶切	藥喻四「根」絲也	音藥
藥喻四「詢」遑也	以斫切	藥日三「蛤」亂也	而灼切
曷来一「冢」日甚也	力達切	東澄三「冲」譌	直中切、俗冲字
東並四「貌」義訓判読不可	音蓬	東並四「司」義訓判読不可	筑贖切
東心一「瞠」𧈧の異体字	先恭切	東匣一「莞」肝の異体字	胡公切
支見三「怨」𧈧、載也の異体字	俱為切	脂喻三「温」夷の異体字	夷の同上
魚来三「年」盧の俗体	力諸切	虞溪三「勞」驅の異体字	驅の俗字
虞非三「妹」簠の異体字	方娛切	模疑一「僻」説見虞韻疑母	音吳
齊曉四「臚」櫨の俗	櫨の俗	皆曉二「呻」■也	古乖切、獸名
仙滂四「筭」義訓判読不可	匹玄切	麻徹二「潭」説見肴韻曉母	丑加切
青見四「鉗」説見山先二韻見母	胡大切	尤奉三「匙」説見滂母	縛尤切
紙影三「牒」義訓判読不可	於鮪切	止照三「宣」説見旨韻照韻	之耳切
至心四「趣」■也	音四、角也	代並一「浹」説見隊韻並母	蒲漑

こうした『玉篇』等と共通する字は『五音集韻』にもすべて確認することができ、しかも『書学正韻』における増字には『玉篇』と内容が合わず『五音集韻』と共通する例が少なくない。次に、そうした例の内まず『玉篇』等において義訓をもたず反切のみある字について『書学正韻』と『五音集韻』とで共通した義訓を有する例を挙げる。『五音集韻』義訓は『書学正韻』に同じであるために記載を省略した。

書学	玉篇ほか	書学	玉篇ほか
東見一「𦘔」衣巾也	古紅切	庚滂二「𦘔」車声	匹庚切
冬泥一「箸」鳥名	女冬切	陽審二「楮」色莊兒	色莊切
同 上「祈」器也、未詳	奴冬反	桓匣一「𦘔」深闇也	胡官切
鍾照三「腸」𦘔、舌削物也	之容反	談泥一「缸」田千畝	奴甘切
魚群三「𦘔」弓弣也	巨魚切	談影一「𦘔」黯也	於甘於敢二切
魚喻四「𦘔」弓也	與魚切	腫穿三「蓋」恐也	尺隴切
魚来三「涼」日照	力魚切	齊滂四「喧」妖疾也	匹米切
虞微三「症」魚名	音呼、又音無	旱匣一「便」豕名	音旱
模見一「俘」山名	古胡切	有非三「瑀」風細兒	裴負切
諄喻四「晒」金也	乎鈞切	遇群三「藁」竹器	其句切
灰曉一「冽」黒色也	呼候切	霽透四「准」觸也	牛辰切
哈精一「飭」財也	子才切	泰見一「乎」未耜	骨外切
哈清一「𦘔」急行兒	千来切	過清一「犁」芟也	七臥切
諄邪四「巾」衣也	音旬	候定一「拔」厨庖也	徒候切
灰疑一「弘」魚名、又五禾切	五回切	業疑三「𦘔」鞍槍兒	于劫切、又他盍切

このほか、混端一の「楨、丁本切、山也」について『篇海』に「搜真玉鏡」を出典として「丁本切」と反切があるが、『五音集韻』に「丁本切、山也、出會玉篇」とあって義訓が『書学正韻』と一致する。この例は「搜真玉鏡」という素性のよく分からない資料が「會玉篇」と内容的関連を有するらしいことを示唆するものとしても興味深い。また、例えば陽審二「楮」色莊兒はおそらく『玉篇』の「色莊切」という反切を誤認したもので、最後の業疑三「需」鞍愴兒も『玉篇』に喻母相当の反切があるのにもかかわらず『五音集韻』における誤った判断を踏襲して疑母としたものであるらしいが、こうした『五音集韻』の誤りを踏襲する例は他にも次のようなものが確認された。下には『五音集韻』における合併韻に置かれた増字を『書学正韻』において分置する際に帰属先を誤ったと思われる例も併せて挙げている。ちなみに例 13) について、掲出字を『五音集韻』元版では「莽」、黒口本・成化本では「耒」に作っており、『書学正韻』の参照した『五音集韻』版本が元版であることが示唆される。

- 01) 東疑一「明」火盛兒→『玉篇』魯紅切。『五音』「火盛兒」。“魯魚”の誤り。来母に置くべき(15)。
- 02) 支幫三「賠」魚也→『玉篇』毗支切、魚也。『五音』魚也。「毗」は並母相当。『五音』の誤りを踏襲。
- 03) 脂溪三「掾」女字→『玉篇』苦危切(支韻相当)。『五音』女字。合併韻の分離を誤るか。
- 04) 脂溪三「蓑」水回為沢。本胡罪切。借為此声→『集韻』支韻の一字小韻。合併韻の分離を誤るか。
- 05) 脂心四「怠」滑也→『集韻』焰隨切(支韻)。『書学』支韻に「怠」が重出。合併韻の分離を誤るか。
- 06) 微群三「跚」→『玉篇』巨希切、馬。『五音』馬也。巨希切は開口相当。『五音』小韻境界を誤認か。
- 07) 虞非三「壺」人姓、未詳→『玉篇』音秩、人姓。「秩」は質直切で入声字。『五音』の誤りを踏襲。
- 08) 齊滂四「覺」通也。余見脂韻滂並二母→『玉篇』方迷切、通也。『五音』通也。「方」は非母相当。
- 09) 真床三「約」旦也→『玉篇』是人切、早也…。『五音』毛の異体字、「旦也」。「是」は禪母相当。
- 10) 盍影一「綺」窻声→『玉篇』烏合切、窻声下。『五音』窻声。合韻相当。合併韻の分離を誤るか。
- 11) 同 上「凹」→烏合切、又烏交切、凹凸也。『五音』凹凸也。合韻相当。合併韻の分離を誤るか。
- 12) 同 上「佞」跛也→烏合切、跛也、又胡甲切。『五音』跛也。合韻相当。合併韻の分離を誤るか。
- 13) 同 上「莽」虫名→『玉篇』莽、烏合切、虫名。合韻字。合併韻分離を誤るか。
- 14) 帖從四「睫」→『玉篇』子葉切、目旁毛也。『五音』目旁毛也。葉韻字、合併韻の分離を誤ったか。
- 15) 洽知二「訴」→『玉篇』丁念丁甲二切、下也…。『五音』下也。狎韻字。合併韻の分離を誤ったか。
- 16) 洽孃二「醜」門関也→『玉篇』門関醜也、又女狎切。『五音』門関醜也。狎韻字。分離を誤ったか。
- 17) 仙心四「旧」飛兒→『玉篇』音宣切、飛兒。『篇海』音宣、飛兒。『五音』飛兒。影母相当。

また、『五音集韻』と『書学正韻』とで共通する義訓を有するものとして、以下のような例が見つかった。

- 01) 江明二「抻」豊也、大也、有也、厚也→『玉篇』…豊也、有也、厚也。『五音』豊也、大也、有也、厚也。
- 02) 脂孃三「瓮」車厄也→『玉篇』杞夷切、軾。『五音』車厄也、又捉夷切。
- 03) 模見一「蝶」鳥鳴→『玉篇』大胡切、鳥名。『五音』鳥鳴。
- 04) 齊端四「觜」兼觜良馬、又田黎切→『玉篇』丁奚切、兼觜、又音啼。『五音』兼觜良馬。
- 05) 哈見一「𦍋」堅石盾也。又五对切→『玉篇』牛对居衣工哀三切、堅石也、磨也。『五音』堅石磨也。
- 06) 欣溪三「𦍋」口斤切、…少也→『玉篇』去斤切、…𦍋也。『五音』口斤切、少也…。
- 07) 清照三「政」賦也→『玉篇』之盛切、說文曰正也。『五音』賦也、周礼…。
- 08) 侯明一「孩」大人衣也→『玉篇』音牟、女人衣巾。『五音』大人衣也。
- 09) 談心一「縻」縻綏垂兒→『玉篇』所今切、人欸也。『五音』縻綏垂兒。『書学』覃韻心母に重出。
- 10) 腫穿三「櫟」強也→『玉篇』尺勇切、充也。『五音』強也。
- 11) 銑匣四「督」坑也→『玉篇』胡涓切、玉色。『五音』黒口本「戸犬切、坑也」、成化本「坑也」。
- 12) 暮並一「研」不束物也→『玉篇』伏路切、田器也。『五音』不束物也。
- 13) 祭滂四「鼻」匹銳切、釣也→『玉篇』匹銳切、鉤也。『五音』匹銳切、釣也。
- 14) 線心四「輒」悦也→『玉篇』息恋切、税也。『五音』悦也。
- 15) 靜知二「淹」弓開也→『玉篇』陟进切、引榜也。『五音』弓開也。
- 16) 薛照三「畝」陡惡重疊畝咀之兒→『篇海』「俗字」之烈切、畝咀兒…。『五音』陡惡重疊畝咀之兒。
- 17) 職審三「佐」推也→『玉篇』舒力切、糝也。『五音』推也。

この他にも、例えば江溪二の「咏、牛鼻捲也」について『玉篇』「苦各切、牛鼻捲」、『五音集韻』「牛鼻捲也」であるとか、東並四の「羊、獸名」について『玉篇』「歩紅切、獸」、『五音集韻』「獸名」であるといったような、「也」「名」といった要素の有無という点で『五音集韻』と共通する例もあるが、ここで挙げるには数が多すぎることもあり割愛する。

最後に、『五音集韻』編者が従来の韻書の義訓中から取り出した字、また従来はなかった字を新たに創出・補充した字について『書学正韻』にその反映がみられる例を挙げる。

- 01) 東端一「𦍋」（「綴」或体）→『五音』…綴字中隱注亦作。昌黎子改為大字。
- 02) 魚喻四「𦍋」（「奮」或体）→『五音』上（奮）同。元在奮下隱注、今新出大字也。
- 03) 養泥四「𦍋」乃𦍋切、此字無賓主、不合六書之法、俗制→『五音』乃𦍋切…昌黎子爲並母之下有毗養切第四等之字違其偏狹門法、故荆安泥母用乃𦍋切𦍋爲第四音和、却用毗𦍋切𦍋亦是第四音和、此二字通互相切、不違門法也。
- 04) 沒幫一「不」博沒切、鳥飛上不下来也、余見勿韻非母→『五音』博沒切、未許也、非也、此一字、

勿字韻中分物切、昌黎子為俗用及多、故竊立幫母、安於沒字韻中、与普沒切旆、蒲沒切勃、莫勃切沒、豈不順哉、後進詳之、知不謬爾。

八、小結

以上、『書学正韻』における韻目、収字配列、反切、等位整理、増字の内容について具体的にみてきた。おそらく『書学正韻』は李氏らが示唆するように『広韻』に依拠した資料ではなく、また清人が述べるような『六書統』等を韻によって並べ替えたものでもなく、韻目が二〇六種類揃っている『集韻』を基盤として用い、そこに一六〇韻構成の『五音集韻』（おそらく元版）を参考にして字母および等位の表示を加え、反切も『五音集韻』を参照して部分的に変更し、さらに『五音集韻』から『玉篇』等に由来する字や『五音集韻』編者の創見によって生じた字を取捨選択して組み込む、そういった編纂過程を経た資料であるとみるのが妥当なのではないかと思われる。宋代を過ぎると『広韻』に比して存在感を失っていくようにみえる『集韻』が『書学正韻』のベースに用いられていることは興味深いが、これについては『集韻』の収録字数もさることながら、その義訓に『説文解字』の内容が多く採用されているという特徴が、文字の学を推究する楊桓の考えに合致した部分もあったためという理由も考えられよう。

注

- (1) 李新魁・麦耘一九九三『韻学古籍述要』陝西人民出版社。
- (2) 『六書統』は京都大学人文科学研究所に所蔵の影印による（資料番号：経-X-3-32-A）。該本は台湾・国家図書館所蔵元版（資料番号〇一〇〇一）を複写したものであるらしい。引用中、■の部分は版面破損のため判読不可。
- (3) 王慶忠一九九八「楊桓篆書《李翰林酒樓記》」『書法芸術』、肖燕翼一九八四「記元三家書《無逸篇》卷」『故宫博物院・院刊』。陶宗儀の『書史会要』は京都大学所蔵清家文庫本による。
- (4) 『四庫全書總目提要』卷四十一「六書統」項に、献上した年について「至大丙申」とするのは「至大戊申」の誤りかと思われる。
- (5) 所蔵目録の「元至大間江浙行省刊後至元二年余謙及明代遞修本」の記載に関連して、『六書統』に付せられたラベルに「元至大間江浙行省刊元統間余謙修補本」とあり、台湾国家図書館善本書室に備え付けの『国立中央図書館善本書目』八十六頁では元々「元順帝時」とあったものを手書きで「後至元二年」と書き換えていて、判断の変遷があったことがうかがえる。一九九六年に出された『国家図書館善本書誌初稿』（経部）でも「後

至元二年」を採用している。二九七頁。

- (6) 国家図書館本『書学正韻』は京都大学人文科学研究所に所蔵の影印（資料番号：経-X-4-14-A-1）による。もとにした国家本の資料番号は〇一一二一。
- (7) 『文字音韻訓詁知見書目』（湖北人民出版社二〇〇二）、二七四頁、資料番号〇五七六二至〇五七六五。『中国古籍善本書目』（上海古籍出版社、一九八九年）経部、四七二一四七三頁、資料番号四九九三至四九九六。
- (8) 原文「大致用《広韻》的分韻，而併臻韻於真，故止二百〇五韻。但相應の入声櫛韻併不併於質。…（中略）…韻序也作了調整，如将魂、痕兩韻前移，与真諄文欣等韻相從，将元韻後置，随寒桓刪山仙等韻為類，与《韻鏡》以下各韻図の処置相同」。前掲『韻学古籍述要』、一七三頁。
- (9) 寧繼福『校訂五音集韻』（中華書局、一九九二年）、前言。
- (10) 『広韻』は沢存堂本（芸文印書館、一九八六年影印）、『集韻』是北京図書館本（中華書局一九八八影印）、『五音集韻』は明・成化本（寧繼福一九九二『校訂五音集韻』中華書局）を用いた。
- (11) 比較に際しては、辻本春彦『広韻切韻譜』（朋友書店、一九八六年）および佐々木猛『集韻切韻譜』（北九州中国書店、二〇〇〇年）の恩恵を被った。また、大岩本幸次『金代字書の研究』（東北大学出版会、二〇〇七年）に付録の『五音集韻』切韻譜も用いた。
- (12) 「論《五音集韻》与宋元韻図韻書之關係」（『政治大学学報』、一九六五年、第十一期）。
- (13) 『五音集韻』における等位整理の状況については大岩本幸次一九九八「音韻史研究資料としての『五音集韻』」（『集刊東洋学』第八〇号）を参照されたい。
- (14) 本節の記述に際して、『玉篇』は沢存堂本（中華書局、一九八七年影印）および宮内庁書陵部所蔵の宋本、『龍龕手鏡』は高麗版（中華書局、一九八五年影印）、『五音篇海』は台湾・故宮博物院所蔵の金刊元修本を参照した。また『五音集韻』について東洋文庫所蔵の元版と、台湾・国家図書館所蔵のいわゆる“明刊黒口大字本”（『目録』八四頁）を参照した。この黒口大字本は寧繼福氏が「明翻刻崇慶本」と呼んでいるものにおそらく該当するもので（寧氏前掲書前言六頁）、明版ではあるが金版の様相を非常に良く保存している興味深い版本である。書誌については『国家図書館善本書誌初稿』（経部）二九一頁、資料番号〇一〇九八を参照されたい。
- (15) 寧氏前掲書の校訂記「第一頁」⑧参照。

（本稿は科研費 21720124 の助成を受けたものである。）